

推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (3)

—発達心理学での学習支援—

石川 隆行

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日

推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (3)[†]

—発達心理学での学習支援—

石川 隆行*

宇都宮大学共同教育学部*

本稿では、第一報で示した宇都宮大学共同教育学部教育心理分野の推薦合格者に対する入学前学習のあり方の改善の中で、新書課題の発達心理学領域での学習に関しての部分をもとめたものである。合格者が新書課題を行った結果、提出されたレポートには発達の視点から子どもの問題を捉えるだけでなく、教員の姿勢として重要な点にも言及があった。これは、本課題が小学校教員養成に資するものとなったといえよう。

キーワード：高大接続改革、入学前学習、アドミッションポリシー、発達心理学

1. 入学前学習の意義と目的

わが国で大学生の学力低下が指摘されてから久しい。小方(2011)によれば、大学生の基礎学力の低下が問題になってきたのは、大学進学率が上昇をみせる2000年頃からとされる。また、2000年の大学審議会答申では大学入試の改善が議論され、そこでは、大学が入学前の学習準備のため学習課題を課すこと、高等学校での学習と関連づけた入学準備学習を行わせることなど、大学における新入生に対する入学前教育の必要性が検討されている。

日本生涯学習総合研究所(2006)は「大学の新入生教育に関する現状調査」を実施した。全国の公立、私立大学を対象とした結果、「入学者の学力低下が問題となっている」と回答した大学が全体の4割、「学力低下と未履修の両方が問題となっている」と回答した大学が全体の3割でみられていた。また、ベネッセ教育総合研究所(2014)の報告によれば、全国の大学全体では76%、国立大学では69%の割合で「以

前より学生の学力が低くなったこと」を問題視していることが明らかになった。

大学生の学力低下と入学前教育の必要性が叫ばれる現状をふまえ、文部科学省(2015a)は高大接続改革の実行プランを示した。高大接続改革とは、高等学校、大学入試選抜および大学教育が一体となる教育改革である。また、文部科学省の高大接続改革に係る質問と回答(FAQ)(2015b)では、学力の3要素(1. 知識・技能、2. 思考力・判断力・表現力、3. 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)を育成・評価することが重要であり、義務教育段階から一貫した理念の下、学力の3要素を高校教育で確実に育成し、大学教育で更なる伸長を図るため、それをつなぐ大学入学者選抜においても、多面的・総合的に評価する一体的な改革と示されている。

高大接続改革において、大学に求められた具体的な改革としては、アドミッションポリシー(入学者受入の方針)の明確化や大学入学者選抜要項の見直しなどがあるが、その中で、入学前教育の充実を図る方策を立てるよう指示されている。この点について、文部科学省のFAQ(2015b)では、早期に合格が決定した後の学習意欲を継続する観点から、以下の内容を促進するよう示している。

- (1) 特に12月以前の入学手続き者に対しては、入学前教育を「積極的に講ずる」こと。
- (2) 各高等学校においても、大学と連携し学習意欲を維持するための必要な指導を行うよう努めること。

[†] Takayuki ISHIKAWA*: Educational practices in pre-admission studies for students selected by recommended admission: Report on the study support in region of the developmental psychology (3)

Keywords: high school / university articulation reforms, pre-admission study, admission policy, developmental psychology

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: takayuki-i@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(3) 学校推薦型選抜の場合、合格決定後も、高等学校の指導の下に、高大連携した取組を行うことが望ましい。(例：入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況を高等学校を通じ大学に報告させる等。)

また、入学前教育の目的について、涼本は「①モチベーションの維持(学部、学問の中身に魅力を感じ、意欲をもっているため)、②事前に大学での学びの理解(入学後にさらなる力を発揮してもらうため)、③不安感の解消(大学での学びに対する不安感を払拭するため)」と述べている(河合塾,2008)。

これらの方針、目的のもと、各大学では入学前教育が実施されている。その内容は、例えば、小論文やレポート作成、読書感想文、高校での教科に関する復習、大学内での授業、講座の実施など多岐にわたる。そのなかでも、小論文、レポート作成は、高大接続改革における学力の3要素である「思考力・判断力・表現力」を育むとされ、小論文、レポート作成の活用が高等学校学習指導要領のねらいにおいて強調されている(文部科学省, 2014)。また、早稲田大学(2017)の調査から、大学の入学者選抜および入学前教育において、レポートの作成が有効である成果が報告されている。したがって、入学前教育において入学者選抜の合格者がレポートを作成することは非常に意義深いといえよう。

また、入学前教育は、大学入学希望者が入学前に求められる能力を涵養するものであるため、大学に設置されたアドミッションポリシーと関連づけることが重要である(大学教育部会, 2015)。なお、本学教育学部学校教育教員養成課程のアドミッションポリシー(入学者受入の方針)は以下の通りとなっている。

- (1) 高等学校における履修案内を理解し、その知識や実技能力を身につけている人
 - (2) ものごとを複数の視点から考察し、自ら判断することができる人
 - (3) 考えや気持ちを的確に表現することができる人
 - (4) 「学ぶ」「教える」「育てる」「発達する」という行為・現象について関心があり、将来学校教員として活躍する強い意志を持つ人
 - (5) 様々な活動に主体的に取り組めるとともに、共感性や思いやりの心をもって行動できる人
- そこで、本稿では、本学教育心理分野の推薦Ⅰ(A)の合格者に行った入学前教育の一例を記した。課題として、指定新書を読み、その内容から自分の意見

を論述するレポート作成を行った。指定新書は、明和(2019)の「ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで—」であった。本書は、ヒトが発達する過程で生じる問題について心理学、脳科学の視点から捉え、発達の本質について正しい理解を求めている。また、近年、教育現場で対応が必要な発達障害や愛着障害について、丁寧に論じている。したがって、本書に向き合うことによって、子どもに対する発達の理解とともに、将来教員となった際に必要とされる専門的知識や手法を考究できるといえよう。なお、今回提示した入学前学習は、発達の視点から諸問題を考察し、自らの考えを主体的に表現するという特徴から、本学アドミッションポリシーに合致するものと考えられる。

2. 発達心理学領域からの課題設定

(1) 課題対象者

2019年度に実施した共同教育学部学校教育教員養成課程教育人間科学系教育心理分野における推薦Ⅰ(A)の合格者3名であった。

(2) 実施期間

2019年1月13日から19日の期間で課題内容を教育心理分野のHP上に提示し、合格者に新書を読んでもらい、その後レポート提出を求めた。入学前学習全8回のうちの1回に相当した。

(3) 指定新書と読書の範囲

指定新書は、明和政子(2019)ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで—ちくま新書であった。読書の範囲は、序章(pp.8-21)、第5章 発達の本質が崩れるとどうなるのか(pp.143-147)であった。

(4) 課題対象者に読み取ってもらいたい内容、ポイントの説明

以下の説明を課題対象者に提示した。

- ①子どもから私たち大人を取り巻く現代社会の問題。
- ②子どもの発達の本質が崩れるとどのようなようになるのか。

(5) 課題対象者に論述してもらいたい内容

以下の内容を課題対象者に提示した。「アタッチメント形成を含む、子どもへの発達支援がうまくいかない、どのような影響を子どもに及ぼすのか。また、それらが子どもに及ぼす影響を考えると、将来、教員となった際に、どのようなことを意識し、対応しなければならないのか。先般の教育記事(ニュース)などの引用をふまえ、考察してください。」

(6) 課題レポートの分量等

A4サイズ1枚あたり40字×30行で2枚程度とした(参考にした記事(曜日,新聞社名等),図書(タイトル,出版社等)を記述する場合は3枚目に表記)。

3. 合格者の課題(レポート)遂行から

(1) 課題対象者のレポート内容

課題対象者の合格者3名に提示した論述してもらいたい点(a.子どもへの発達支援がうまくいかないと,どのような影響を子どもに及ぼすのか, b. 教員となった際に,どのようなことを意識し,対応しなければならないのか。)をふまえたレポート内容の抜粋を示した。

① Aさんのレポート内容の抜粋

- a. 幼少期のアタッチメントが上手くいかないと脳内に喜びや快楽,心地よさを喚起させる線条体の活動が弱くなってしまうことがある。これが理由で普通の刺激では快楽を得られず,もっと強い刺激を求めて薬物などに手を出し,幼いながらも依存症に陥りやすい脳のつくりになってしまう。
- b. 私が教師の立場に立ち,まだ完全に脳や心が発達していない子供達と接するときに大切にすべきことは,コミュニケーションをとることで子供達との間に信頼関係を築いていくことだと思う。まだ発達段階にある子供達に対して,叱ってばかりいることや,初めから「この子は何をいっても聞かないからしょうがない」と見放してしまうと事態は悪化するだけでなく,その子の今後の脳や心の発達に影響を及ぼすことが今回の課題を通して改めて理解することができた。

② Bさんのレポート内容の抜粋

- a. 子どもたちへの発達支援がうまくいかないと,子どもである期間が短くなる,つまり,思春期が早く訪れてしまう。さらに,そういった環境で育った子どもの脳の発達に必要であり大切な「海馬」や「脳梁」,「前頭前野」などが傷ついたり,委縮してしまったりしてしまう。そうなってしまうと,その後の人間形成に大きな影響を及ぼしてしまい,薬物依存に陥りやすくなってしまい,恐怖体験の記憶が消えにくくなり残ってしまうことも考えられる。
- b. 学校は教科を教えるだけの場所ではないことも事実であり,むしろ一人の人間として,子どもというこれからの日本の未来を担う人と接する時間の方が多くあり,そこでは教科の知識より

も心理的なものの見方や技法が多く使われ,そして活かされるものではないだろうか<中略>教員としてそのような苦しい環境を経験してきた子どもと接するときには大切すべきことは「急かしすぎない」ということだと私は考える。

③ Cさんのレポート内容の抜粋

- a. アタッチメント形成がうまくいかなかった時の影響として,喜びや心地よさを喚起させる線条体の活動が弱くなり,快楽を得るためにより強い刺激を求め薬物依存に陥りやすいこと,思春期の開始の早まりから扁桃体と前頭前野にミスマッチが生じ精神疾患が生じやすくなることが示されていた。養育者が前頭前野の役割を果たしながらゆっくと発達させるべき脳のネットワークを過度に早熟させ,一人で恐怖や不安に向き合うしかなかった子どもたち。この背景が思春期に不安や恐怖に対する脆弱性として精神的問題を現れやすくしているという。
- b. 学校現場で子どもたちの変化や問題行動に気づいた時,教員はどう対応するべきか。私は早期にスクールカウンセラー等の専門家と連携することが大切だと考える。その際,子どもの状況をできるだけ詳細に提供したい。<中略>教員と専門家を含む関係機関が効果的に活用された場合には,支援も効果的な展開が予想されるという。私は自分が発信する内容の重要性を理解し,判断に役立つ情報を正確に伝える点を意識していきたい。同時に子どもや家族からの情報収集や専門家への伝達といった場面でのコミュニケーションスキルを向上させたいと思う。

(2) 教員による課題対象者へのコメント

① 序章について

明和氏は,本書を展開するにあたり,大きな2点を考えている。1つ目が「現代社会において急増する子育てにまつわる問題の本質を正しく理解すること」,2つ目は「人類の未来への責任を,今を生きる世代として果たすこと」である。1つ目の子育てにまつわる問題として,序章では,いじめ,不登校などの教育問題,また注意欠如多動症,自閉スペクトラム症,限局性学習症などの発達障害の問題に触れている。これらのワードは,教師になるうえで,また教師になった後も直面する問題であるため,正しく理解する必要がある。皆さんが書いた内容にも記述されていましたが,これらの問題の現状と特徴を今のうちから意識し,学校教育現場にて

解決できるよう自分なりの対応策を考える必要がある。

また、2つ目については環境が脳と心の創発、発達に影響を及ぼすことが述べられている。明和氏の記述とおり、人間の脳と心の発達は環境によって大きく変化する。わが国では少子化、核家族化、都市化、情報化および国際化など、子どもを取り巻く環境が急速に変化している。皆さんが目指す教師は子どもの環境の一部であり、また環境を構成する責任がある。この意味において、重要な責任をもつ教師のありべき姿を入学までに考究してもらえればと思う。

② 第5章 発達の本質が崩れるとどうなるのか？

発達の本質が「連続性」と「多様性」であることが理解できたかと考える。「連続性」は、心と脳が時間経過とともに変化し続けること、「多様性」は、心と脳が時間を経るにしたがい、環境との相互作用により影響を受けることとなる。この章では「連続性」と「多様性」の両者が上手く成り立つことができなかつた事例を紹介している。とくに、アタッチメント形成が十分に行えなかつたことによる成長に及ぼす影響、すなわちアタッチメント障害が説明されている。アタッチメント形成が上手くいかないと、子どもは喜びや心地よさを感じにくくなり、後に強い快楽を得ようと薬物依存になりやすいこと、また、恐怖経験の記憶が消えにくくなり、思春期の時期に恐怖や不安の脆弱性から精神的問題を引き起こす。栃木県内にもアタッチメント障害として診断された児童、生徒が存在し、そのような子どもに教師は明確な知識とともに、寄り添うことが急務とされている。本章を読んで、発達心理学における客観的な知見が教師の子どもへの対応に寄与すること、また、これからの教師は児童、生徒の学習面とあわせて、連続性と多様性をもちあわせる心の発達を支援することが大切であることを心に留めておく必要がある。

4. 今回の課題の意義と今後の改善

提出されたレポート内容において、不適切な発達支援が子どもに及ぼす影響、また教員となった際の意識、対応という論述してもらいたい点が、合格者自らの視点で書かれていた。とくに、発達の視点から子どもの問題を捉えるとともに、教員の姿勢として重要なコミュニケーション、教科学習だけでなく子どもを育てる、関係機関との連携などに言及した点は意義深い。これは、発達心理学に関連するレポート作成から、教員のあるべき姿を探求できたと考えられ、本課題が教

員養成に大きく貢献する可能性を示唆したといえよう。

入学前教育については、近年、初年次教育との連携（南木，2019）、保護者、学生および大学の三位一体での実施（花光，2019）などが注目されている。これらの視点をもとに、今後入学前教育を実施していく必要があろう。

5. 引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2014）. 高大接続に関する調査 <<https://resemom.jp/article/2014/09/17/20450.html>>（2020年3月7日）
- 花光 清（2019）. 入学前教育—新たなe-ラーニング 保護者・学生・大学による三位一体の取り組み— 大学時報, 384, 42-45.
- 河合塾（2008）. 教育改革ing（第17回 入学前教育）, Guideline, 9月号, 47-55.
- 大学教育部会（2015）. 資料2 アドミッションポリシー等に関する論点について 大学教育部会第33回配布資料
- 文部科学省（2014）. 高等学校学習指導要領について <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/03/17/1345098_03.pdf>（2020年3月10日）
- 文部科学省（2015a）. 高大接続改革実行プラン
- 文部科学省（2015b）. 高大接続改革に係る質問と回答（FAQ） <https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1404473.htm>（2020年3月7日）
- 南木 陸彦（2019）. 入学前教育と初年次教育の連携—流通科学大学の「気づき教育」への円滑な移行と準備— 大学時報, 384, 60-65.
- 明和 政子（2019）. ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで— ちくま新書
- 日本生涯学習総合研究所（2006）. 大学の新生入生教育に関する現状調査調査報告 財団法人日本生涯学習総合研究所
- 小方 直幸（2011）. 大学生の学力と仕事の遂行能力 日本労働研究雑誌, 53, 28-38.
- 早稲田大学（2017）. 平成28年度文部科学省委託事業 大学入学者選抜改革推進委託事業 高大接続改革に資する、思考力・判断力・表現力等を問う新たな入学者選抜（地理歴史科・公民科）における評価手法の調査研究 成果報告書 <https://www.mext.go.jp/content/1397824_002.pdf>（2020年3月10日）

令和2年4月1日 受理

Educational practices in pre-admission studies
for students selected by recommended admission :
Report on the study support in region
of the developmental psychology (3)

Takayuki ISHIKAWA